合志楓の森中学校だより

楓の森

R4.2.15（第 11 号）
文責：渕上 佳宏

四半世紀後を見据えて

合志市教委の学校教育課には、「ＧＩＧＡスクール構想」を担当している職員がいます。ハード面を 宮川 主査、ソフト面を 前田 主事が担当されており、二人ともとても優秀です。私（校長）は、昨年度、同課で教育審議員として一緒に勤務し、仕事ぶりを見ていたのですが、このお二人の尽力がなければ、本市のＩＣＴ活用は、現在のように進んでいなかったと感じています。もちろんお二人にとって、「それが仕事」ではありますが、市教育委員会をはじめ、関係する多くの皆様の支えがあって、学校教育は成り立っているということを、私はいつも肝に銘じたいと思っています。

また私は、県教委に勤務していた時期もあります。当時、予算折衝の場面で、いつも苦々しく思っていたこと、それは財政当局から、必ずと言ってよいほど「その事業を行うと（予算を使うと）、どのような成果（定量的、それも短期の見込み）がありますか？」という突っ込みが入ることです。その時私は、心の中で「教育の成果がそんなすぐに現れるものか！」と叫んでいました。「教育は国家百年の大計」という格言がありますが、一つ一つの**教育施策も、その効果が現れるまで、四半世紀（二十五年位）はかかる**ものがあります。今、目の前にいる生徒たちで考えるなら、四十歳前後、油ののりきった仕事人・家庭人として、国や社会を支えている時期になるでしょう。

手前味噌ですが、私は「ＩＣＴに明るい校長」と思われているみたいです。実際、四半世紀前に、パソコンを使って授業をしていました。ただし、当時のＰＣは、ＭＳ－ＤＯＳという直接コマンドを打ち込むＯＳで、もちろんネットワークに接続していません。ですから、その時の技能や知識は役に立たず、今ではネットワークの設定等をＩＣＴに堪能な 井上 教務主任に任せていますし、システムの運用等については、㈱クラウドＩＡの 板東 支援員に助言をいただいています。しかし、いずれＩＣＴ（当時はＩＴ）が、教育の現場に大きな変革をもたらすことは、四半世紀前から予想できていましたし、その変化を**「受け入れる覚悟」**は当時からあったように思います。

少し話が逸れますが、学校は深刻な教員不足に陥っています。これは現在の問題ですが、その原因の一つとして、四半世紀前頃から「少子化」を理由に教員採用を抑制してきたことが挙げられます。四半世紀前の見通しの甘さ、そのツケを今、支払う形になってしまっているのです。それとは対照的に、全ての児童生徒にタブレットＰＣが貸与される「ＧＩＧＡスクール構想」は、このような教育界にあって、画期的な出来事だと言えるでしょう。合志市だけでも、初期費用で六億円弱が投入され、令和四年度も追加調達や運用費等のため、約三千万円が予算に計上されています。

このチャンスをどう活かすのか？ 成果が現れるのは四半世紀後です。「やる方法を考える学校」と「できない理由を探す学校」の間に、ここ数年では大した差は現れないかもしれません。ただし、タブレットを主体的に活用し学びを続ける本校生徒たちには、予測困難な未来社会の変化を**「受け入れる覚悟」**が、確実に芽生えてきていると感じています。

新生徒会発動！！（委員長等任命式）

一月二十八日（金）の帰学活時、オンラインで各常任委員長及び副委員長の任命式を行いました。今回は、教職員は完全に裏方に回り、生徒たちの運営で実施しました。当初は、式の最後に「校長の話」の計画があったのですが、私はそれも辞退しました。なぜなら、今回、委員長等を任命するのは、生徒会を代表する立場の三村 会長だからです。とは言え、いきなり生徒会長に重い役目を押しつけるのもどうかと思い、事前に校長と生徒会長の「長」同士で、初の首脳会議（サミット？）を行ったところです（詳細はＨＰを参照）。

委員長及び副委員長の紹介後、被任命者を代表して、学習・文化委員会の 高橋 委員長に 三村 生徒会長から任命書を渡しました。その後、同じく 高橋 委員長から被任命者代表挨拶があり、委員長としての抱負や決意を述べてくれました。最後には、三村 会長からの挨拶がありました。二人ともちろんノー原稿。さすがです。とりわけ 三村 会長の話は、首脳会議で伝えた私の意もしっかり体し、会長自身の言葉で、新生徒会に対する熱い思いを伝えてくれていました。

オンラインではありましたが、終始、緊張感がある中、今後の合志楓の森中生徒会の発展を予感させる、また合志楓の森中生徒としての誇りと品格が感じられる任命式になったと思います。

学校HPのQRコード